

01 卒業設計

開講年次：学部4回生後期

神戸大学建築卒業設計賞 大賞

SteamSCAPE

—地熱の街に宿る発電の場—

宅野蒼生（遠藤研究室）

現在の社会は、電力の生産を自然エネルギーによる「分散型」へと移行する過渡期にある。そんな分散型の社会がやってくるとき、もちろんその生産の場は、我々の生活の場へと近づくことになる。隔離されたハコであった発電所が「建築になる」。その可能性に着目し、発電の場の未来像を描く。今計画では、衰退が進む温泉のある街に、地域資源である地熱を具現化する建築を提案する。蒸気から始まる資源変換のストーリーに沿って、空間構成やプログラム、発電の場とヒトの場の在り方が変化していく。



30 Warm Water

Phase 03 湯村とソトをつなぐ温泉塔

40

70 Electricity

Phase 02 電気 / タービン・復水器 湯村のコア / 町役場

100 Steam

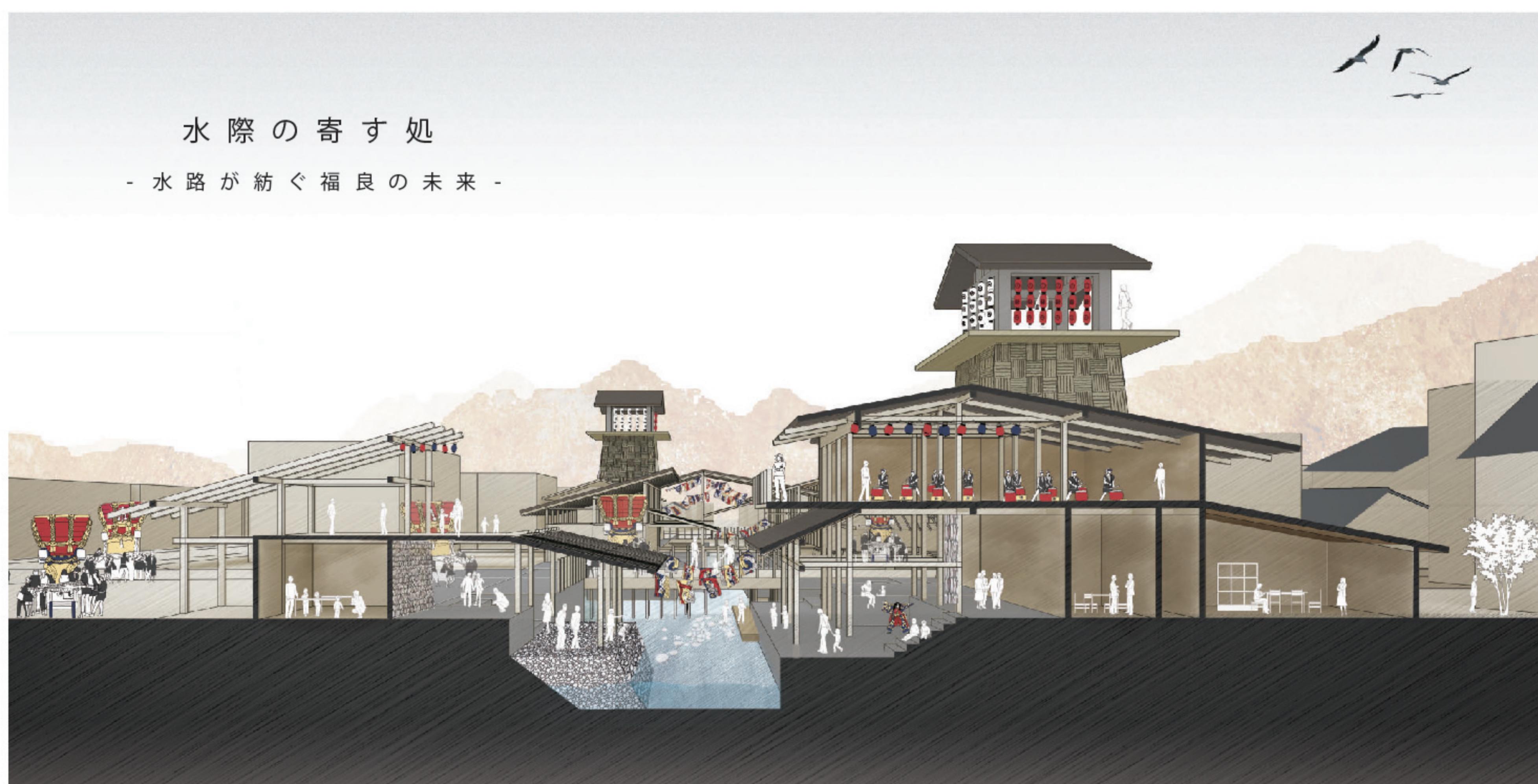
Phase 01 蒸気 / 生産井 湯村の新たな景色を与える場

150

水際の寄す処

植田実香（遠藤研究室）

南あわじ市福良地区。古くからみなと町として栄え、海と共に生き続けてきた町です。しかし、堤防整備や埋め立てにより、海辺の賑わいはなくなり、少子高齢化に伴い、伝統的な街並みや福良独自の生活も失われようとしています。そこで、私は、かつての海岸線であった水路を再生し、その水路と一体化する形で既存の空き地に地元住民と観光客の結節点となる新たな公共空間を計画します。そこに福良の街並みや祭りの要素を加えることで、福良が新しくもこの町らしく生き続けいくきっかけとなる場を提案します。





神戸大学建築卒業設計賞 優秀賞

痕の表象

—名古屋における戦争の記憶—

秋田湧大（中江研究室）

名古屋では急速に戦争の記憶が忘れ去られようとしており後世にその記憶を継承するための場が必要である。

名古屋における戦争の特殊性を最もよく表した空襲の被爆地を抽出し、徹底的な調査と分析により得られた情報をもとに空間化しレイヤリングする手法で、空襲や兵器工場といった隠れていた土地の記憶を表出させた。

7万平米の広大な敷地を地域の人々の日常的な憩いの場とし、大らかな表情を見せる一方で、ふとした時にこの場所の空襲の記憶に触れ戦争に思いを馳せることのできる両義的な空間とした。



神戸大学建築卒業設計賞 優秀賞

露隧道

—西九条「安治川隧道」における河底横断空間の提案—

木村友哉（末包研究室）

日本で唯一の歩行者専用河底トンネルとして、西九条の人々を運び続けてきた「安治川隧道」。その空間的潜在能力とは裏腹にアプローチが貧相で、利用者はこの場所のおもしろさを体験できていない。そこで、地上から河底に降りる高さ24mの部分をオールドメディアの鑑賞空間として建築化することを提案する。既存の河底に沈むハコの両岸背面に穿たれた隧道を露わにする孔は、人々が川をくぐり渡る行為を顕在化する。「安治川隧道」は西九条ならではの、市民の誇りとなるパブリックスペースに生まれ変わる。



2018年度卒業設計発表会

審査講評

末包伸吾

神戸大学大学院教授 審査委員長



2018年度の建築卒業設計賞の審査は、2019年2月16日神戸大学百年記念館六甲ホールで、卒業設計発表会に引き続選考会において実施されました。本年度の卒業設計発表会発表作品は28作品で、発表会での質疑応答の後、まず、審査員による一次投票の結果、佳作以上に相当する賞選考対象作品として10作品が選出されました。選考会は、審査委員長を末包、司会を中江が担当して進められました。選定された10名の学生によって、それぞれ3分を上限とした追加の説明がなされたのち、審査委員からの質疑と該当する学生からの回答・補足説明がありました。これらを経た上で、大賞・木南賞を選定するために、審査委員一人1票の記名投票をおこないました。その結果、この投票で最多得票を得た宅野蒼生君の作品を大賞候補として選出し、ついで次点の2票を得た3作品、秋田湧大君、植田実香君、そして木村友哉君の3作品を対象に再投票を行い、その結果、植田実香君の作品を木南賞候補として選出、他の2作品は優秀賞候補としました。そして後日、これら卒業設計賞の候補作品は、建築学教室の教室会議で正式に各賞に決定しました。

大賞となった宅野蒼生君の作品「SteamSCAPE -地熱の街に宿る発電の場-」は、地熱発電のプラントに、地熱を利用した温浴施設等のコミュニティ施設を誘導させたプログラムを、近代的な建築言語を豊富に用いながら、適切な分節化を行い、山麓部に新たな風景を作り出そうとするもので、きめ細かな地熱開発の分析を通じた、平面・断面計画から生み出される形態が独自の空間をつくりだし、なにより作者のこの場所への強い思いが感じられる作品でした。木南賞の植田実香君の「水際の寄す処」は、淡路市最南端の地区での2年間に及び活動を通

じて導いた問題点と可能性を、従来は「ウラ」であった水路と一体化する形で既存空き地に新たな親水空間を設けて解こうとするもので、丁寧な敷地の読み取りとそれに応じた適切なスケール感の空間造形に優れたものです。

今回もまた選考会を通じて感じることは、自身で、場とプログラムを設定し、空間化する卒業制作では、計画、造形とその表現のみならず、その作品がもつ社会的な意味に加えて、着想にいたる作者の動機、展開の明確さや、作品の意図を人に伝える強さも大切であるということです。これから卒業設計をめざす学生のみなさんは、こうしたことにも考え方を巡らせてほしいものです。



会場：神戸大学百年記念館六甲ホール

審査委員

末包教授を審査委員長とし、選考会選考委員は計画系の全教授5名（遠藤、黒田、末包、北後、山崎）、准教授4名（栗山、近藤、楢橋、中江）、ならびに選考会参加を受諾いただいた非常勤講師10名（設計系演習担当：島田陽、山隈直人、

中江哲、竹口健太郎、光嶋裕介、大谷明弘、近井努、吉武宗平、岩瀬諒子、向山雅之）の計19名とした。選考会はこの19名で行われた。天津大学の鄭穎副教授にオブザーバーとして参加していただいた。

得票数一覧

氏名	卒業設計 題目	1回目	2回目	最終結果
宅野 蒼生	SteamSCAPE-地熱の街に宿る発電の場-	12		大賞
植田 実香	水際の寄す処	2	8	木南賞
秋田 湧大	痕の表象-名古屋における戦争の記憶-	2	5	優秀賞
木村 友哉	露隧道-西九条「安治川隧道」における河底横断空間の提案-	2	6	優秀賞
大西 琴子	きしかん-2日間だけの祝祭の街-	1		佳作
田中 悅	大和の暁-リニア新幹線地下駅計画-			佳作
永本 聰	甲斐縞は、彩る。-山梨県・猿橋における縞生産ミュージアム-			佳作
不動 莉里	りんくうキャンパス-次世代型国際交流都市の構想-			佳作
北條 太一	刑の形-地域の産業と在るこれからの刑務所-			佳作
横田 慎一朗	座・道頓堀-芝居のまち・道頓堀における劇場を中心とした文化拠点の提案-			佳作

神戸大学建築卒業設計賞 佳作

きしかん

—2日間だけの祝祭の街—

大西琴子（遠藤研究室）

日常は観光専門の大学、祝祭の時はホテル。祝祭時のホテル不足解消、観光産業の成功を目的として計画。ホテルは大学のイベントとして学生たちが運営。日常でもレストランなどは学生がマネジメントする、実践的教育の中心的大学。建物は縦導線の壁で挟まれた大空間とチューブで構成。各教室は浮き、積層建築だが開放感があり、非日常的空间の余韻がある。四角と正円の少ない要素だが、どれだけ多様な空间・活動が作れるかを追求。だんじりの迫力、岸和田の情熱とともに存在する。



大和の暁

—リニア新幹線地下駅計画—

田中惇（楓橋研究室）

2045年、大阪～東京間がリニア新幹線によって結ばれる。その中間駅として古都、奈良が選定された。経路のほとんどが地下であるリニア新幹線。交通機関の発展によりますます都市間の時間的距離は短くなり、都市の均質化が進む。東京や異国之地からやってきた人々にどのような空間で出迎えるべきであろうか。地下54mと地上を1本の階段で結び、この大階段はならまちへと出ていくための『予告編』として機能する。ならまちへとかけ出していくための駅舎の提案。

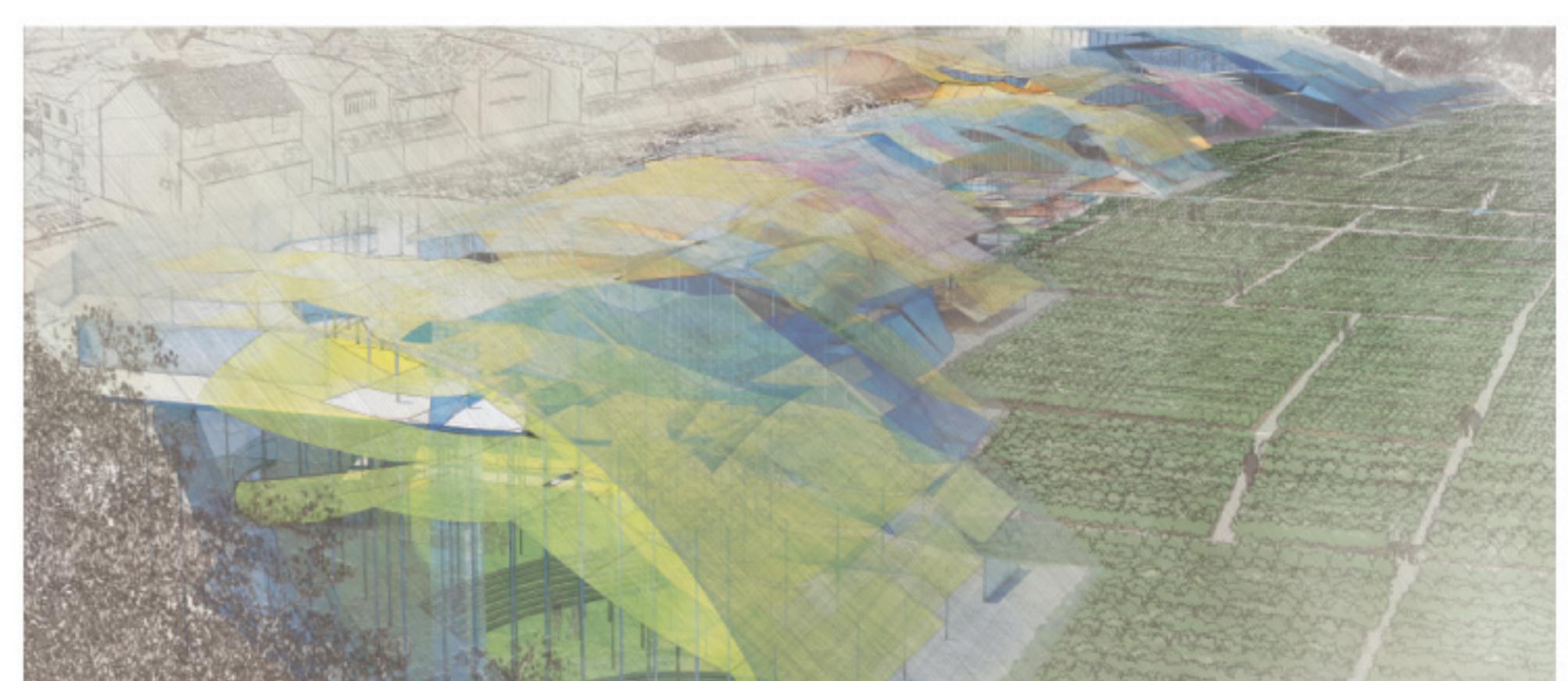


甲斐絹は、彩る。

—山梨県・猿橋における絹生産ミュージアム—

永本聰（末包研究室）

地場産業の生産を介して、個々の体験を彩り、まちの風景を彩る地域アイデンティティの表出したミュージアムを提案する。かつて山梨県・猿橋地区のアイデンティティであった甲斐絹によって形成される空間の中で絹生産を行い、生産風景を体感し、桑畠や織り上げられた絹が地域に溢れ出していくことで、地場産業と密接に関わった原体験・原風景を作り出していく。4つの役割の絹を組み合わせ、形態・色彩を操作していくことで、甲斐絹を多角的に体感可能な多彩な空間を生成した。

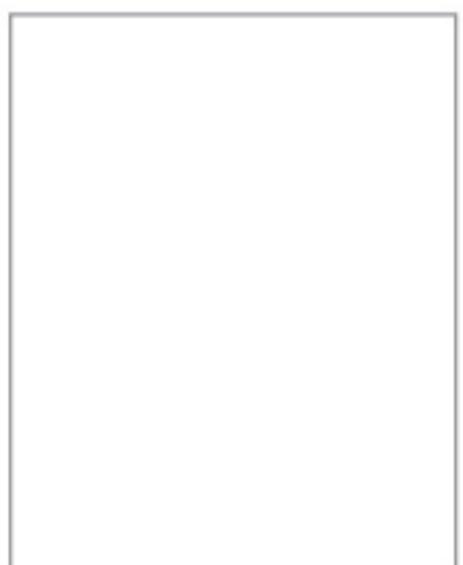


神戸大学建築卒業設計賞 佳作

りんくうキャンパス

－次世代型国際交流都市の構想－

不動栄里（楓橋研究室）



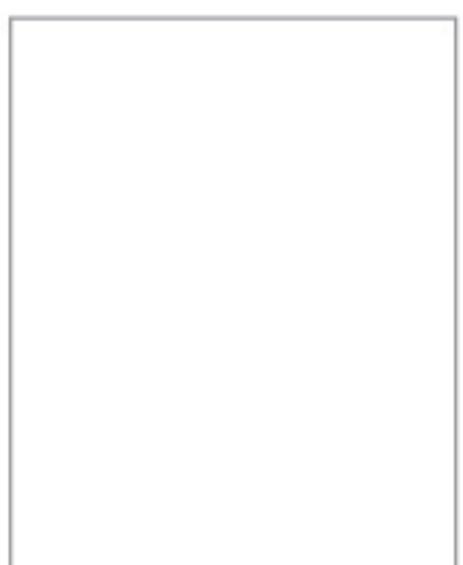
日本の空の玄関口、関西国際空港。そこから一駅、陸の玄関口、りんくうタウン。本土との結節点であり、様々な国籍、目的を持った人たちが交わる。このような敷地のポテンシャルを生かし、国際交流を通したエリアの活性化を図る。その先駆けとして、本土の先端部分に、国際交流の教育研修施設を計画する。観光客、学生、地域住民が新たな体験を共有することで、学び成長し、この場所が、観光地としてだけではない、かけがえのない出会いを生むことを期待する。



刑の形

－地域の産業と在るこれからの刑務所－

北條太一（遠藤研究室）



再犯率が増加し続ける現在、原因は大規模隔離管理され、与えられた生活が送られる刑務所。そこで衰退の一途をたどる地方産業と合わせた、地域と支え合うこれからの刑務所の形を提案する。

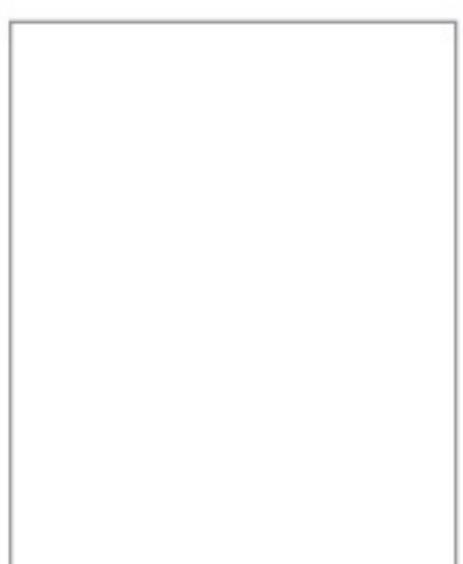
ここでは三段階の場を設け、段階的に外部との関り方や内部環境を変化させ、精神面や技能面を踏まえた周辺環境全体での社会復帰を図る。



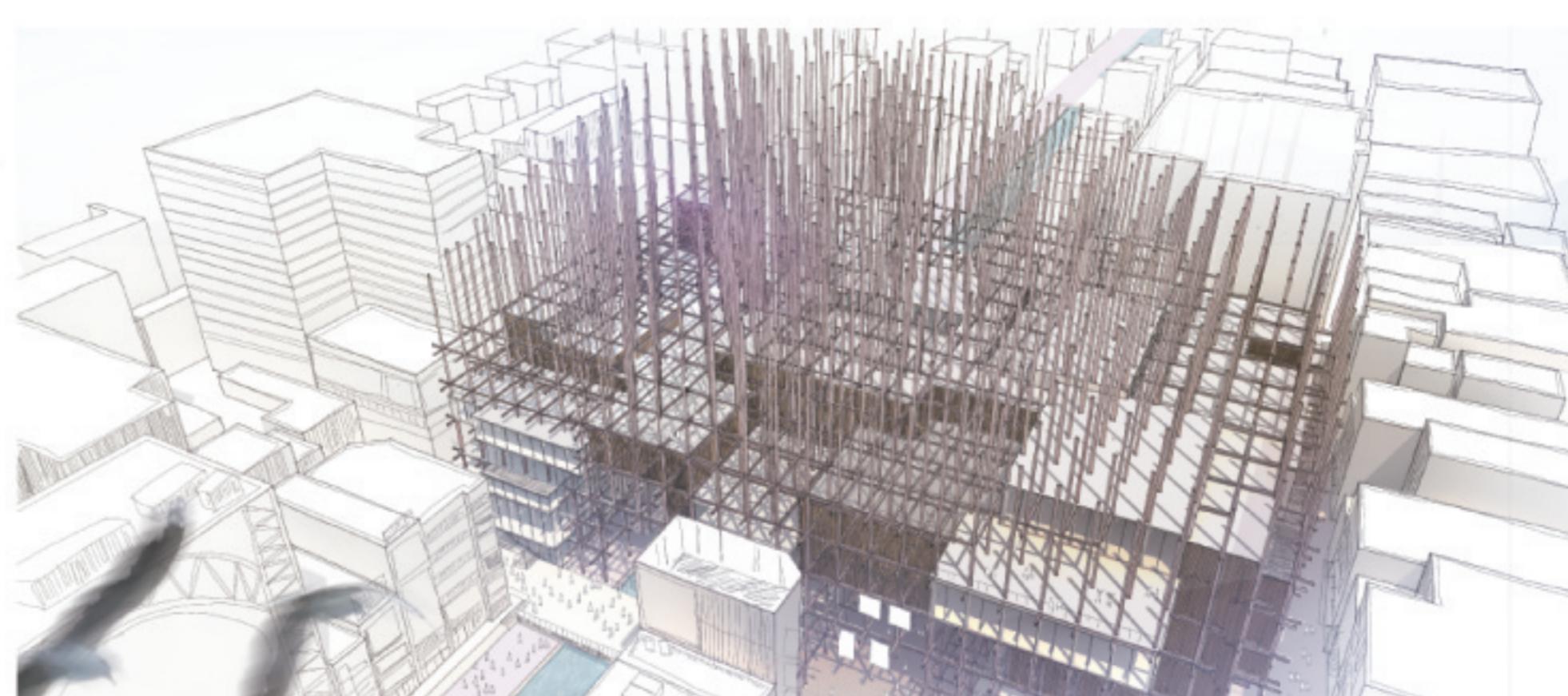
座・道頓堀

－芝居のまち・道頓堀における劇場を中心とした文化拠点の提案－

横田慎一朗（末包研究室）



かつては道頓堀五座と呼ばれる劇場群が並び、一大劇場街として栄えた道頓堀。現在はそのすべてが廃座となり、劇場とともに道頓堀の文化までもが消えかけている。チェーン店の看板が乱立する光景が道頓堀の本当の賑わいなのだろうか。道頓堀が、単なる「くいだおれの街」で終わってしまわないよう。道頓堀にもう一度、芸術を。人々の活動によって風景が作られていく、道頓堀の文化を引き継ぐ芸術拠点を提案する。

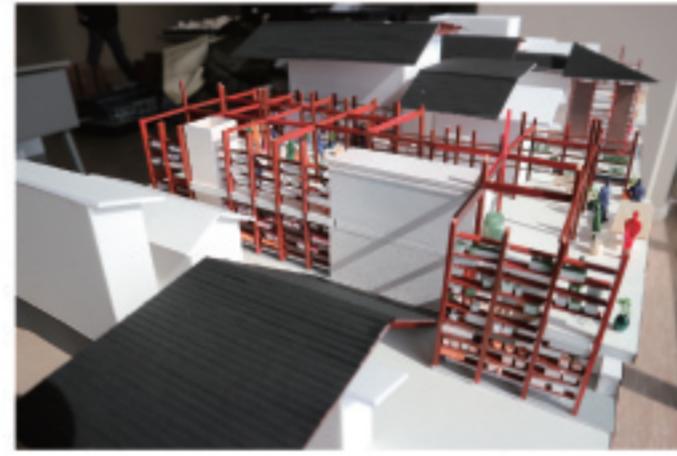


神戸大学卒業設計 作品紹介

ひらいて、むすんで
—地域を結ぶワーキングベース—
吉田 有希（北後研究室）



喧噪のうつわ
—集積する暮らしが交わる輪島朝市通り—
笠川 瞳（山崎研究室）



こしきしまくらし
—朝がたと夕がたの双子建築—
佐伯 健士朗（山崎研究室）



終の景、湖上の別れ
—奥浜名湖におけるホスピスと火葬場が繋ぐ環一
中倉 俊（遠藤研究室）



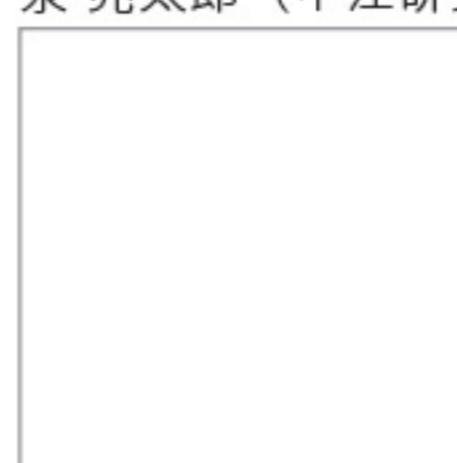
水路の序幕
—琵琶湖疏水における水と歴史のメモリアルー
松井 優香（末包研究室）



山麓のまちの裏庭
—やがて朽ち緩斜路をして跡を宿さん—
脇本 正輝（中江研究室）



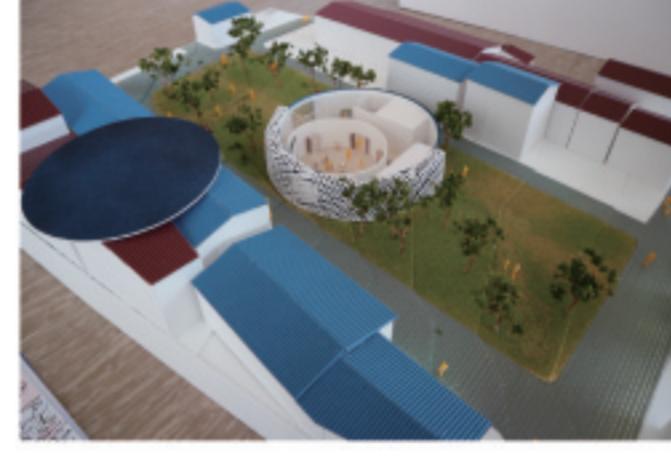
幻燈の小路
—奈良を映し発信する映像文化拠点—
泉 亮太郎（中江研究室）



“東向き”商店街の再生
堅田 千尋（楓橋研究室）



めぐる宿
—広島西条における観光型宿泊施設の提案—
清水 紗英（黒田研究室）



Communion
—船場センタービルの減築によるエアリアリノベーション—
中島 安奈（楓橋研究室）



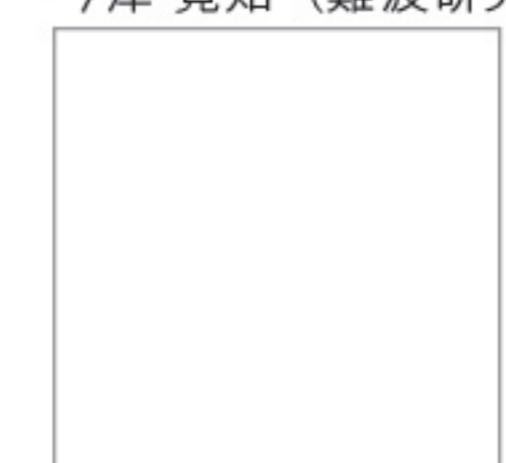
作劇のまち
—宝塚南口駅前地区からの都市回遊性の創出—
山田 千彬（楓橋研究室）



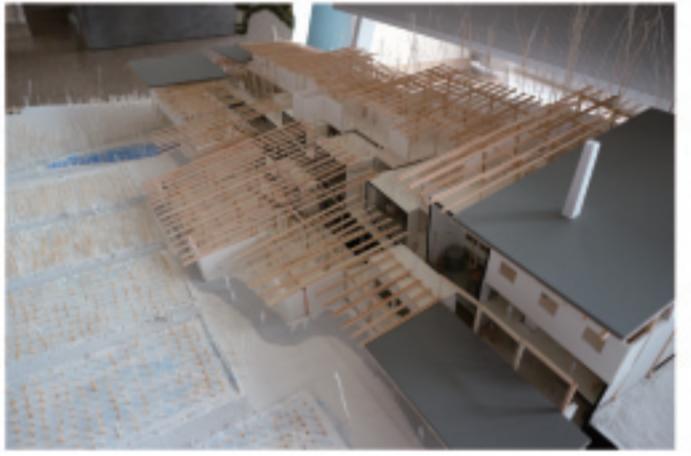
Space C
—まちを組むコミュニティ空間—
KIM EULIM（北後研究室）



つながりの拠点
—広島都心部再開発計画の提案—
今津 寛知（難波研究室）



醸すまほろば
—三木市吉川町における酒造展示体験空間の提案—
黒田 英伸（栗山研究室）



京・鳥居本 水しるべ
瀬戸口 由佳（山崎研究室）



屈伸する孤島
—六甲アイランドにおける分散型スポーツ科学大学の計画—
檜垣 裕一（栗山研究室）



山郭に集う
吉野 愛美（北後研究室）



街と繋がるオープンスクール
大村 太秀（北後研究室）



■卒業設計発表会の様子



2018年度卒業設計発表会

作品講評

大賞

SteamSCAPE –地熱の街に宿る発電の場–

宅野蒼生（遠藤研究室）



国連が掲げた持続的開発目標 “SDGs” をいかに達成するのか、人類は今大きな課題を背負っている。宅野さんの取組みは、この課題に対する優れた解決策のひとつになる可能性を秘めている。資源のない日本だが地熱には恵まれていることに着目し、熱水をくみ上げ蒸気をつくり、蒸気を使って電気を起こし、温度の下がった温水まできちんと使う、というサイクルを組み立て建築化している。地熱のあるところにつくるわけだから地域に根差し自律分散型の社会に向かうというのも明るい話題で嬉しい。発電所的な工場施設を連想させるデザインに難ありとの指摘もあったが、地熱発電の仕組みを細部にわたって理解した設計手法は褒められてよい。むしろ、最適な熱資源利活用であることに説得力を持たせるためには、配管系統をしっかりと見える化することをお勧めしたい。

審査委員 大谷弘明

木南賞

水際の寄す処

植田実香（遠藤研究室）



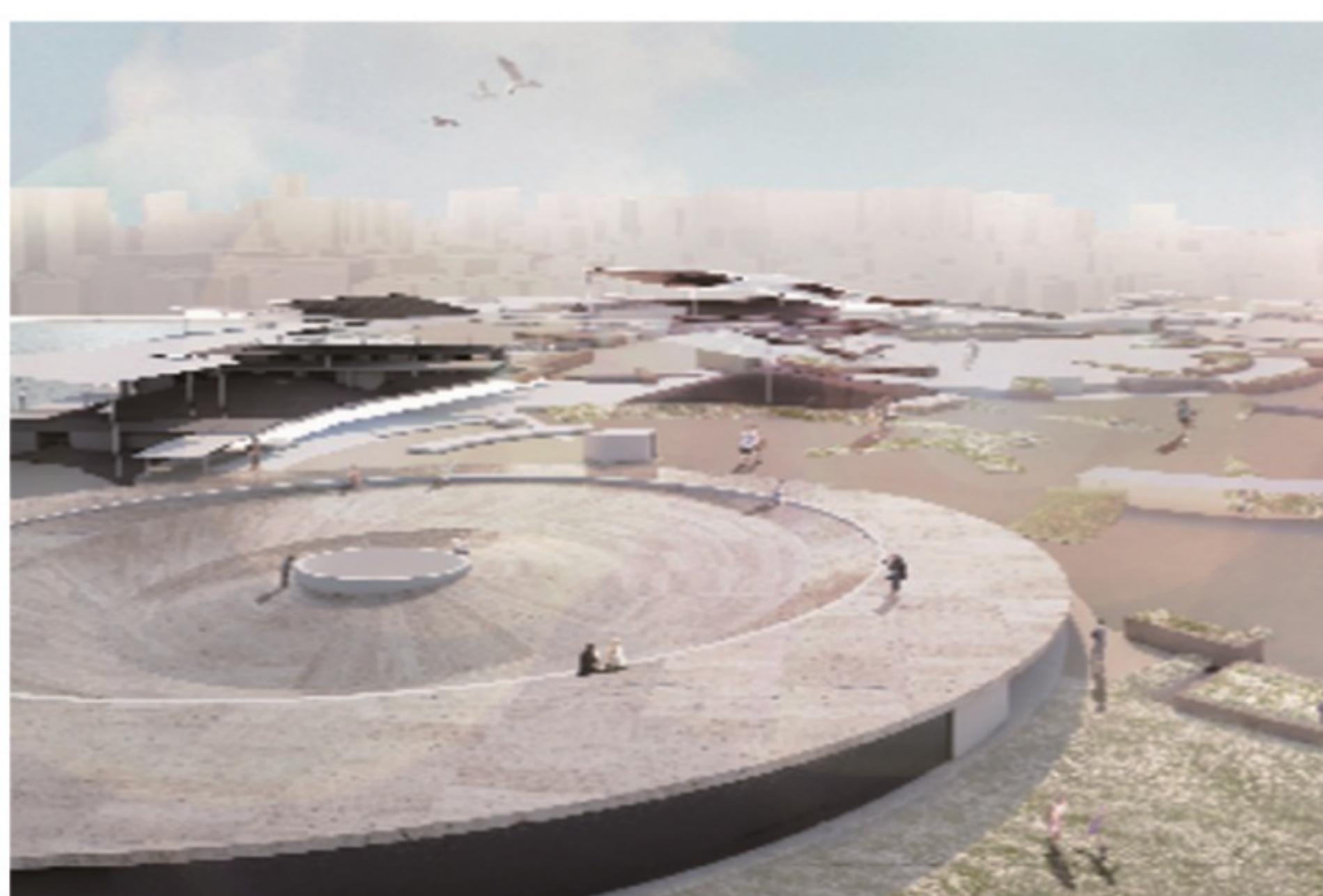
最終審査に残った 10 作品の中で、テーマにおいてもデザインにおいても最も地味ともいえるこの作品が、結果的には他の先生方の票も集めて木南賞を獲得したことは少々意外であったが、しかし大変喜ばしい。設計者は 2 年間この港町に入り込み、自らの見聞とリアルな空間体験をもとに設計に臨んでいる。現状の問題点を肌で感じながらも現状の中から発想の欠片を見出し、卒業設計にありがちな奇をてらうような意匠は封印して、身体感覚から紡がれる親密な空間・場所としてデザインして見せた。見る人をその世界に引き込んでくれるような模型表現も良い。祝祭空間としての躍動的な魅力もさることながら、日常の空間としての穏やかな居心地の良さも感じられる。地味だが真っ当で健全だ。作品の端々に設計者の敷地に対する愛情とも言えるものが滲み出ている。何よりこのような姿勢、設計者としての資質を高く評価したい。自分への戒めの念も込めて。

審査委員 吉武宗平

優秀賞

痕の表象 –名古屋における戦争の記憶–

秋田湧大（中江研究室）



秋田湧大くんの「痕の表象－名古屋における戦争の記憶－」は、射程の広い時間をテーマにした作品として、負の歴史に対する強い危機感の表れであり、建築の可能性を拡張するものである。当事者ではないにも関わらず、果敢にも歴史を空間化する試みは、説得力のある形でデザインの根拠を示す必要があり、言葉で曖昧なことを述べるのではなく、建築としてそれを示したことの意味は大きい。正解のない問いに、これからも向き合ってほしい。

審査委員 光嶋裕介

優秀賞

露隧孔 –西九条「安治川隧道」における河底横断空間の提案–

木村友哉（末包研究室）



木村友哉の卒業設計は近代の遺構（使用中なので厳密には遺構ではないが）を発見し、手を加えるプログラムだ。この型のプログラムの良さは既存形態という他者を持ち込むことで卒業設計の陥りがちな自家撞着を防ぐ事が可能で、アイデアを積み上げて精度を上げていくのにも優れたプログラムだとは思う。が、それだけに頻出するので、差異化も難しく審査する側は点が辛くなる。彼の設計も実際穴だらけにも思えたが、質疑応答で形態操作と地域の関連が浮かび上がり、また設計者に必要な確信とコミュニケーション能力が感じられた。

審査委員 島田陽